

## 旧友との懇談の一コマ

酒井 董美<sup>ただよし</sup>

十二月十四日数十年ぶりで旧友二人に出会い、懇談してきた。場所は浜田市三隅町である。

前日、益田市に本拠を持つ、民話の会「石見」「定例会」に三ヶ月ぶりで出席した。会場の益田市立図書館までマイカーで約二時間半、一七五キロ離れている。その帰りに立ち寄ったのである。

M君は八十五歳、O君は八十歳。お互い歳を取ったものである。M君夫人は病床にあり、長く入院中、O君は十月に夫人を亡くしている。かく申す筆者の家内も二十年前に失っている。

けれども、お互いは明るかった。M君は長く県下の教育畑にあり、教師の他に社会教育主事や教育事務所に在籍したこともある。小学校校長を歴任、三隅小学校校長で定年を迎え、現在は地方公務員浜田支部長をしているという。

一方、O君は大阪で会社員だったが、家庭の事情で帰郷、珠算を近所の人々に教えたところ、受講者が増え、県の珠算連盟の重鎮にもなっている。今回、手渡された写真は今から三十年前の平成六年十一月三日、出雲市にあるサントピア出雲を会場に行われた全国珠算連盟島根支部指導者講習会のおり、彼から依頼を受けて筆者が「島根の昔話と伝説から」の題で講演したときのものである。

M君と知り合ったのは島根大学生時代であり、昭和三十年代に遡る。教育学部教授・溝上泰子先生を取り巻く常連の一人であり、今日に至っている。昭和三十四年師走のある日。溝上先生宅訪問の仲間四名が、西浜田にあるK君宅に忘年会と称して集まった。M君の他にT君と筆者だった。そのとき若さにまかせ、お互い将来の抱負を述べあった。「民話とかわらべ歌を収集する」と語った筆者のことを彼が繰り返したが、確かにこの日話したことを続けている筆者ではある。

O君は、中学校時代、はじめは勉強に身が入らず、教科書は学校に置いたままで遊んでばかりいたが、中学校の先生が「江津工業高校へ入るのは難しいが、だれか希望するのはいないか」と言われたのに、誰一人手を挙げなかったもので、つい「はい」と挙手したところ「理科が不得意のおまえでは無理だ」と言われたのに反発、予復習をしっかりとやって試験に臨んだところ、満点近く取った。カンニングを疑われ、職員室に呼ばれて、そこでもう一度試験用紙に答案を書かされたことがあった。問題なく回答したので疑いは晴れたが、同窓会の席上、先生が謝られて、初めてそのため職員室に呼ばれたのだったのかと知ったものです。と笑って語ったのが、印象的だった。彼は現在、石見郷土研究懇話会の一員として、機関誌『郷土石見』に研究論文の発表を続けている。

このような五時間にわたった歓談の後、筆者は満足してマイカーの人となったのである。(元島根大学法文学部教授)



サントピア出雲で講演する筆者「全国珠算教育連盟島根支部指導者講習会」(平成6年11月3日)